

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	身ぶり・しぐさの意識に見る子どもの構えの発達
Author(s)	飯住, 良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 8 : 22 - 32
Issue Date	1977-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045089
Right	
Relation	



身ぶり・しぐさの意識に見る 子どもの構えの発達

飯住良夫

一、私たちが知りたいこと

日頃、子どもたちと接していると、いろいろな子どもたちの姿の特徴を見つけることができる。それを日頃見ているからであろうか、一人一人の子どもたちが目前にいなくとも、顔つき・表情等が思い浮び、一人一人の子どものちのそれぞれの「その子らしさ」というのは、結局、顔つき・表情・身ぶり・しぐさ等が大部分を占めていると思う。

教師対子どもということだけでなく、人と人との間において、顔つき・表情・身ぶり・しぐさなどから、相手の心理状態を読みとることは、珍らしいことではあるまい。

「以心伝心」「目は、口ほどにものを言う。」などのことばを、人間関係の中で生み出してきたのも、文字や音声や媒体としない言語行為の存在を認めてきていることにはかならない。

文字や音声を媒体としない言語行為を認める時、文字や音声を通してのことばの習得以前において、子どもたちの人間としての機能を含め内言の発達に関心が向けられねばならない。

「手」の動きを一つとってみても、「手」の動かし方によって、それを注目する他者にある内容を伝達してしまふ。しかし、それにも、習得、及び発

達の過程があつて、ある一定の「手」の動きの様式を、どう受けとめられるか、あるいは、ある情動を表現するのに、「手」に一定の様式の動きを持たせることができるか、などにかかわる能力は、相手との心理的にかかわり、どの程度に意識することができるといふことと関連している。

私たちの言い方で言えば、人は人の構えを見てとることなしには、少くとも人間関係の言語活動は行われぬし、音声・文字を媒介としない肉体そのものを使う言語活動の殆んどは、その人自身の構え方を内容としているものである。

たとえば、手まねきをする動作一つにしても、その動作はその状況下における単独の動作なのであつて、動作といへば、われわれは、パターンとして思い描きがちではあるが、その行為者自身のその場における構えと無縁たり得ない。言い換えれば、いつでもどんな場合でも適用する同じ手まねきはない。共通の手まねきで、いつも間に合わせるとするならば、かならず、いつかは、相手はその信号を見て理解に苦しんだり、その行為者に対して、不信・不快の念を抱くにちがいない。

従つて、この動作にどんな構えを見てとるかということは、年齢的にも、習得・発達過程が考えられなければ

ならない。また、音声を聞いて、その音声者がどんな構えを内蔵していると聞きつけるかも同様である。日常生活において、一般的にはあるが、子どもたちの行動の常識なり能力を問うている対象は、はっきりこの方面のことである場合が多い。

われわれは、この習得や発達こそ、最も肉体的生理的感覚的などところで、培養されている言語活動の根源ではないかと思うのである。

二、調査方法

調査Iについて

別掲のような内容であるが、意図は、囲みの中のことばをどう聞きつけているかを見ようとしたものである。ことばをどう聞きつけるかということは、先述の構え方(動作・意図・態度)との関係を知るといふことである。囲みの中のことばは、構えが一つでない幅広くとれるものを選んだ。

また、6・7については、その語尾変化の聞きつけ方によって、子どもたちの男女の性にかかわる構えを見ようとした。

問題IIについて

人間の「ぶり」の中には、「男ぶり」「女ぶり」といふように、身体の部分の動きだけでなく、それら

を総合した全体像をつかまえる働きもある。それらの「ふり」の中で、子どもたちの生活の中において、特に構えのはっきりしたものを選んだ。

問題Ⅲについて
身ぶり・しぐさの具体例を掲げ、

それがどのような内的状況を表出したものであるかをたずねることによって、身ぶり・しぐさを表わすことばに、子どもたちがどれほど人の構えを想定できるようになっているかを知らうとしたものである。

囲みの中のことばは、任意に選出されたものである。

調査期間

昭和五十一年四月～五月

調査対象

二年	横浜・汐見台小	81名
三年	東京・町田南第四小	72名
四年	横浜・汐見台小	37名
	横浜・汲沢小	39名
五年	東京・町田第三小	36名
	東京・玉川学園小学部	33名
六年	東京・檜町小	28名
	東京・町田第四小	37名
合計		363名

一年生は、質問の意図を解しかねることから対象から除いた。

調査時間は、どの学年も、調査ⅠⅡで二十分～四十分、調査Ⅲで、二十分～三十分で行なった。

調査Ⅰ

の中のことばを、()の中にいれるとすると、どれにいられますか。考えられるだけ()の中に○をつけてください。
1. なにしているの

- ア「() そんなところで。」
- イ「() おかあさんは。」
- ウ「() なにもしないで。」

2. ほら

- ア「() あれを見てごらん。」
- イ「() だからいったでしょ。」
- ウ「() やっぱり。」

3. だってねえ

- ア「() いやなんでもん。」
- イ「() 気がすすまないもの。」
- ウ「() : : わかってないわねえ。」

4. どうだい

- ア「() からののちょうしは。」
- イ「() ぼくのうでまえば。」

5. なんだい

- ア「() そんなものいらないうよ。」
- イ「() それは。」
- ウ「() そうだったのか。」
- エ「() しっかりしろよ。」

つぎの6と7は、()の中に、A・Bがいられるものをかながえられるだけ、A・Bのしるして

れてください。

6. A いいよ B いいわ

- ア「() もうたくさんだ。」
- イ「() それでうまくいくよ。」
- ウ「() よくできているね。」
- エ「() さんせいだよ。」
- オ「() わたしがやるから。」
- カ「() かまわないもの。」
- キ「() 同じだわ。」

7. A そうかな B そうかしら

- ア「() ほんとに。」
- イ「() おかしいな。」
- ウ「() それからどうなったの。」
- エ「() そんなはずがないよ。」

調査Ⅱ

三人の人が、それぞれ、つぎのようすをしています。

- Aの人 知ったかぶり
- Bの人 知らんぶり
- Cの人 知らぬぶり

(1) ほんとうは知っているのは、どの人ですか。

- (2) ほんとうは知らないのは、どの人ですか。

調査Ⅲ

の中的身ぶり・しぐさと

むすびつのは、どれですか。

1. うでぐみをする

- ア「() 考えごとをしている。」
- イ「() おこっている。」
- ウ「() がまんしている。」
- エ「() がんばっている。」
- オ「() てじなをしている。」

2. うでまくりをする

- ア「() がんばっている。」
- イ「() あつがっている。」
- ウ「() はりきっている。」

3. ふくれつつら

- ア「() おこっている。」
- イ「() すねている。」
- ウ「() 気にいらぬ。」
- エ「() ふざけている。」

4. かおをそむける

- ア「() 気にいらぬ。」
- イ「() ばかにしている。」
- ウ「() はずかしがっている。」
- エ「() きたないものを見た。」
- オ「() 見たくないものを見た。」

5. あごをなでる

- カ「() げんこつをよけた。」
- ア「() 自まんしている。」
- イ「() とくいになっている。」
- ウ「() 考えごとをしている。」
- エ「() ひげをさわっている。」

6. あたまをかく

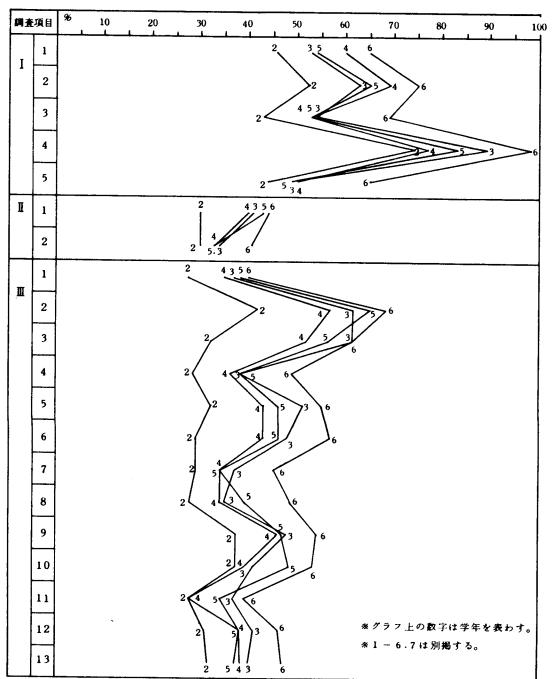
- ア「() はずかしがっている。」

- イ「()でれている。」
 ウ「()あわてている。」
 エ「()こまっている。」
 オ「()はんせいしている。」
7. **ひぎをたたく**
 ア「()はっと気づいた。」
 イ「()かんしんしている。」
 ウ「()なるほど思った。」
 エ「()けっしんしている。」
 オ「()うんどうしている。」
8. **したをだす**
 ア「()からかっている。」
 イ「()しめしめと知っている。」
9. **くちびるをかむ**
 オ「()はなをなめている。」
 ア「()くやしがる。」
 イ「()なくのをがまんして知っている。」
10. **くびをひねる**
 ア「()考えこんでいる。」
 イ「()うたがっている。」
 ウ「()しんぱいしている。」
 エ「()こっている。」
11. **むねに手をおく**
 ア「()よく考えている。」
 イ「()おどろいている。」

- イ「()おどろいている。」
 ウ「()まよっている。」
 エ「()はんせいしている。」
 オ「()びょうきをしらべて知っている。」
12. **よこ目で見ると**
 ア「()ばかにしている。」
 イ「()にくんでいる。」
 ウ「()見たくないけど見た。」
13. **ためいきがでると**
 オ「()あいずをしている。」
 ア「()しんぱいしている。」
 イ「()くるしがっている。」
 ウ「()あきれている。」
 エ「()あきらめている。」
 オ「()しんこきゅうしている。」

三、調査の結果から考えられること

●全般の反応率より見られる子どものすがた
 まず、調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて、正誤含めて、調査に反応できているかというところを見ると、次のようになつた。



◎反応の動きが、全学年、ほぼ同型に：

選択肢の多寡によってもいくらかの影響があるが、課せられた問題について、ほぼ同型の反応を示していることは、人間成長の上で、大いに関心をひくところである。

しかも、二年生の子どもたちが下限を守り、六年生の子どもたちが上限に位置し、三・五年が混濁していることは、発達階梯の解明の上で、何らかのヒントを与えてくれているように思える。

子どもたちが、七・十二年の体験の

中で、自己の肉体内に育ててきたもの、あるいは、育ちつつあるものの反応として読む時、子どもたちの成長の一断面を見ることが出来る。

このグラフだけで、成長の発達階梯を考えるのは、早計であろうが、たとえば、調査Ⅰについて、反応率の高い順にならべて考えてみると、人間の感覚的イメージ化の方向をうかがうことができる。(三・五年に多少の変化が見られるが、ほぼ、次のようにならう。

1. どうだい
2. ほん

順位	2年	3年	4年	5年	6年	
1	うでまくりをする ②	②	②	②	②	うでまくりをする
2	くちびるをかむ ⑨	③	③	③	③	ふくれつつら
3	くびをひねる ⑩	⑤	⑨	⑩	⑥	あたまをかく
4	ふくれつつら ③	⑨	⑤	⑨	⑤	あごをなでる
5	あごをなでる ⑤	⑥	⑥	⑤	⑨	くちびるをかむ
6	ためいきがでる ⑬	⑩	⑩	⑥	⑩	くびをひねる
7	よこ目で見ると ⑫	⑫	⑫	④	④	かおをそむける
8	あたまをかく ⑥	⑬	⑬	⑧	⑧	したをだす
9	ひざをたたく ⑦	④	④	①	⑬	ためいきがでる
10	かおをそむける ④	⑦	①	⑫	⑫	よこ目で見ると
11	したをだす ⑧	⑪	⑦	⑬	⑦	ひざをたたく
12	むねに手をおく ⑪	①	⑧	⑦	①	うでぐみをする
13	うでぐみをする ①	⑧	⑪	⑪	⑪	むねに手をおく

○内の数は、問題番号を表わしている。

3. なにしているの
 4. だってねえ
 5. なんだい
 少なくとも、この範囲の中では、子どもたちが、耳に音を聞きつけ、身ぶり・しぐさをイメージ化する、難易の差と受けとめてよいであろう。
 このことを、選択肢についての反応を加味しながら、後に詳しく考察を加えてみたい。

出題者の方で任意に作成した問題に対して、子どもたちは、型の明確な反応を示してくれている。
 A うでまくりをする・ふくれつつら
 B あたまをかく・あごをなでる・くちびるをかむ・くびをひねる
 C かおをそむける・したをだす・ためいきがでる・よこ目で見ると・ひざをたたく・うでぐみをする・むねに手をおく
 のように、その反応順位を追っていくと、三つの反応グループにわけられそ

うである。
 このことは、子どもたちの構えとしての身ぶり・しぐさ意識の発達の上で、その変容を解く糸口がありそうなどころである。
 さらに、先述したように、二年から三年へ、五年から六年への各間が、先の三つのグループを大幅に越えず、交錯が激しいのは、興味深いところである。
 出題者の方では、子どもたちができるだけ、身ぶり・しぐさを、イメージ化しやすいものと配慮して作成した問題の反応であることを思うと、子どもたちは、イメージ化の上で、ひいては、身の内に育てつつある構え意識の上で、何らかの分化を起しているものと考えられる。
 このことは、子どもたちの選択肢についての反応を合わせて考えなくてはならない。後に詳述したい。
 ◎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに対する反応の差は？
 先述のように、各学年同型の反応の動きを示してくれているが、今一つ問題にしておきたいと思うのは、調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについての反応の差である。
 最初に意図したところは、調査方法のところ为先述したが、反応率の順位は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅱとなる。つまり、Ⅰは、語尾表現に音をだぶらせ、その変容によって意味内容が異ってくることをど

う識別するかを知りたいという意図で作成されたものである。Ⅱは、全体像をつかまえての「ふり」の識別である。Ⅲは、身体各部位の動きにともなうイメージ化の過程における識別である。
 日常の子どもたちの生活ぶりを見てみると音を聞きつけ識別するという、やや直観に近いものが、高いものうなづけるところである。さらには、初めに意図したわけではないが、Ⅰに比し、Ⅲ・Ⅱは、やや説明的である。Ⅱに至っては、説明的であるばかりか、やや逆説的さえある。
 このあたりのことが、子どもの反応に難易を起させたのではなからうか。
 グラフの見方
 全—全体人数 2.3.4.5.6—学年
 ア・イ—選択肢記号
 数字—人数
 折れ線グラフ—全体人数に対する反応人数の率を選択肢別に
 学年間の動きを表わしている。
 帯グラフ—全体反応人数(A)内の数字Vに対する選択肢別反応人数の占める割合。
 ◆調査Ⅰについて
 各設問毎に、選択肢別の反応率をグラフ化し、全体反応の高い順に並べると次のようになる。

I-4 どうだい

	全	ア	イ										
2	81	59	61										
3	72	64	64										
4	76	60	56										
5	69	57	57										
6	65	62	61										
全	363	302	299(601)	ア 50					イ 50				

I-2 はら

	全	ア	イ	ウ															
2	81	66	35	28															
3	72	68	48	19															
4	76	69	56	32															
5	69	57	49	28															
6	65	61	52	31															
全	363	321	240	138(699)	ア 46					イ 34					ウ 20				

I-1 なにしてるの

	全	ア	イ	ウ															
2	81	64	33	15															
3	72	70	41	3															
4	76	76	53	7															
5	69	69	42	11															
6	65	64	47	13															
全	363	343	216	49(605)	ア 57					イ 36					ウ 8				

I-3 だってねえ

	全	ア	イ	ウ															
2	81	61	36	8															
3	72	57	55	4															
4	76	63	53	5															
5	69	55	48	7															
6	65	57	57	16															
全	363	293	249	40(582)	ア 50					イ 43					ウ 7				

I-5 なんだい

	全	ウ	イ	ウ	エ																				
2	81	45	54	27	18																				
3	72	21	69	22	29																				
4	76	33	72	15	31																				
5	69	21	69	13	31																				
6	65	43	63	26	37																				
全	363	163	327	103	146(739)	ア 22					イ 44					ウ 14					エ 20				

この五つの設問の各選択肢の反応の動きを分類してみると三つになろう。

A (高反応を示すもの)
 「からだのちょうしは。」「ぼくのうでまはは。」「あれを見てごらん。」「そんなところで。」「いやなんだもん。」「それは。」

B (中位反応で上昇するもの)
 「だからいったでしょ。」「やっばり。」「おかあさんは。」「気がすすまないもの。」「そんなものいらないよ。」「しっかりしろよ。」

C (低反応のもの)
 「そうだったのか。」
 「なにもしないで。」「……わかってないわねえ。」

◎直接↓操作↓間接への発達の苦しさ。
 AとCを比較してみたい。
 Cにある二つは、出題の際、意図的に含めたものである。Aに比し、「なにしてるの。」↓「なにもしないで」と結びつける時、叱責や詰問でも、何かをしてそうされるのではなく、「なにもしない」状況を対象としての叱責、詰問である。「そんなところで」との結びつきと比較すると、逆説的な状況を知的に操作しイメージ化することを要求されている。

また、「だってねえ。」↓「……わかってないわねえ。」の結びつきは、「……」の表出している状況の読みポイントがある。一対一の対応において考えると話者が、ある心的内容をふせて、その言語行為を持つことよって継続、転換をはかったものと考えられる、あるいは、一対複数の対応における状況も想定できる。つまり、話者が、直接相手を非難・揶揄するのではなく直接対象として第三者を設定することによって相手を間接的に非難・揶揄しているという状況を対人意識のあり方とのかかわりで想定することを要求されている。

「ふり」「意図」等を含めイメージ化できていくかということにかかわってくる。

さらに、推理を許してもらえれば、A・B・Cにそれぞれ分類されたものうち、「質問」「指示」に比較して「非難」「拒否(絶)」「言いわけ」「自慢」「納得」「叱責」「激励」等の情動反応を伴うものが、上昇、下降の変動を示していることは、人間の成長階梯をさぐる上で興味を覚えるところである。この面の全体的な考察はまだ後の調査研究を待たねばならないであろうが、三年でピークに達しているものに、「そんなところで。」「気がすまないもの。」「それは。」があること、「そんなものいらないよ。」のように、三年・五年で落ち込んでいくものなどがあることを指摘しておく。

このような情動反応を伴うものの変動と先述のA・B・Cでの考察を選択肢別の分配率に見る子どもたちの意識の向けられ方を考えあわせると、直接反応の構えから間接反応の構えの発達を推察することができないであろうか。構える意識の発達ということである、情動反応を伴ない、さらには屈折・転換等、意識の変動を伴うところに、人は、より強烈な構えを見てとれるように成長してきたことを直観する。

I-6-① A いいよ

	全	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ													
									10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	81	58	45	24	39	19	20	15													
3	72	56	47	27	44	8	10	16													
4	76	68	37	22	42	13	18	18													
5	69	54	38	21	45	11	18	4													
6	65	38	25	15	22	25	14	1													
全	363	274	192	109	192	76	80	54(977)											ア29	イ20	ウ11

I-7-① A そうかな

	全	ア	イ	ウ	エ													
						10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	81	44	40	26	32													
3	72	35	28	32	28													
4	76	45	44	13	48													
5	69	37	38	12	48													
6	65	21	25	5	35													
全	363	182	175	88	191(636)											ア28	イ28	ウ14

I-6-② B いいわ

	全	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ													
									10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	81	8	16	35	20	55	42	34													
3	72	11	10	22	21	60	47	33													
4	76	4	21	31	14	65	48	21													
5	69	13	16	30	9	64	41	27													
6	65	7	11	18	11	22	30	16													
全	363	43	74	136	75	266	208	131(933)											ア14	イ14	ウ8

I-7-② B そうかしら

	全	ア	イ	ウ	エ													
						10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	81	28	20	27	33													
3	72	36	18	16	36													
4	76	33	18	28	21													
5	69	32	19	21	12													
6	65	24	10	21	10													
全	363	153	85	113	112(463)											ア33	イ17	ウ25

◎性別別に関連する
身ぶり・しぐさ意識
○「よ・わ」対「かな・かしら」
●「よ」と「わ」の識別感覚
6についてのグラフを概観すると、動き方は、ほぼ同じであるが、ただ問題にしておきたいことは、アイウエオカキの順が、「よ」と「わ」とでは、逆転していることである。選択肢に含まれた「わたし」・「だ」「よ」「ね」「もの」「わ」などにひびかれているものと思われるが、六年生の率の低さが気にかかるところである。このグラフに関する限り率の高さは、「よ」「わ」の識別感覚がより鮮明であることからすると、六年生の低さは、その感覚がよくなっていくのではなく、性別別に伴う識別感覚が、言語行為の中では特に重要には意識されていないと考えてやるのが妥当ではなからうか。
●「かな」と「かしら」の識別感覚
「よ」「わ」の識別よりも、型が明確になっている。
特に、「かな」の三年に注目しておきたい。三年を中心にして二年・四年との間の変化を見ると、明らかに、先の「わ」「よ」における六年生とは異なり、この面での識別感覚が、四年生において育つものと考えられる。しかし、「かしら」の変動を関連させて考えてみると、「よ」「わ」とは異なる

II (1)

	全	A	B	C													
					10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	81	29	29	15													
3	72	25	40	23													
4	76	12	34	45													
5	69	9	37	43													
6	65	14	32	39													
全	363	89	172	165(426)											A21	B40	C39

II (2)

	全	A	B	C													
					10	20	30	40	50	60	70	80	90				
2	8	29	21	23													
3	7	35	11	27													
4	7	54	13	9													
5	6	55	4	9													
6	6	56	11	12													
全	363	229	60	80(369)											A62	B16	C22

り、選択肢の順位が、交錯しているのがわかる。
「よ」「わ」「かな」「かしら」を、交錯(混乱?)の度合で並べてみると、「かしら」・「かな」・「よ」「わ」となるが、この交錯(混乱?)が、識別不可能の意か、言語意識の上での性別にかかわる音の聞きつけにこだわらないところへ育ってきているがためなのか、なお研究考察が必要となるところである。
◆調査IIについて
子どもたちが示した反応は、次のようになる。
「知ったかぶり」↓「知らんぶり」
「そ知らぬぶり」は、互いに相反する方向・内容を持つ「ぶり」であり、しかも、本心を直接表現するのではなく、本心を「ぶり」の形によって包んでしまふことを共通としているものである。
このような基本設定をもつ設問であるので、各設問におけるA・B・Cの反応の上昇・下降による接近・難反の様相に注目してみたい。
「ほんとうは、知っているのは…」とたずねられた(1)の動き方を見ると、Cの上昇に比較して、Bのとまどいを示す変化が気にかかるところである。
Cの変化については、調査者の予測をくつがえされたところである。Bの方がCよりも反応しやすいものと予測していたわけであるが、C・Bの差異は、「ぶり」に「そ」が加わり、「そぶり」として身ぶりよりも「ぶり」の意図が強くなることにあるが、子どもたちの日常生活と直結して考えてみると、「そ」の意識が、存外強いものと思われ、意外であった。
しかし、その成長の階段を見ると、BとCが、四年で逆転して、五・六とB・Cの動きが似ていることを合わせ考えると、「ぶり」が初めに育ち、「そぶり」意識が四年あたりで育ち、その後、安定していくと考えられる。さらに、このことを根拠づけるため

に、Aの動きに着目してみると、B・Cに対する接近度が、四年生から離れしつつ下降していることが指摘できる。二年においては、「知っている」のは、「知ったかぶり」の人であり、三年で、相反する構えを見つげ出し、四年で識別が可能になると言える。つまり、二年においては、未だ、「ふり」の意識が鮮明に分化していないものと推察する。

しかし、二年生においては、まったく分化していないかという点、(2)の反応を見ると、二年生の分化も認められ、成長に期待が持てようである。

「知らない」のは、「知ったかぶり」の人であることを、わずかに見やぶっている。

三年生では、(1)における矛盾の気づき、とまどいと同様、「そ」にひっぱられて、いくらかの不安定さを見せるが、二年生よりは、明確に見てとっている。

このように見ると、「ふり」「そぶり」意識は、誕生以来、わずかに八・九年の生活体験で育ってくるものと考えられ、意識変容のおもしろさと同時に、この時期におけるこの面での教育の大切さを痛感するのである。

●調査IIIについて

別掲したように、全体反応率の高いものから、選択肢別の子どもの反応は、次のようになる。

III-2 うでまくりする

A	全	ア	イ	ウ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	20	54	27									
3	72	37	46	50									
4	76	29	49	53									
5	69	30	38	66									
6	65	40	39	53									
全	363	156	226	249(631)	ア25	イ36	ウ39						

III-3 ふくれつつら

	全	ア	イ	ウ	エ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	68	16	19	2									
3	72	62	38	34	8									
4	76	66	40	45	7									
5	69	53	51	46	4									
6	65	58	48	47	8									
全	363	308	193	191	29(721)	ア43	イ27	ウ26						

III-6 あたまをかく

B	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	30	28	9	34	14									
3	72	54	54	17	31	12									
4	76	51	57	12	32	10									
5	69	52	53	15	27	10									
6	65	47	55	18	42	21									
全	363	234	247	71	166	67(785)	ア30	イ31	ウ9	エ21					

III-5 あごをなでる

	全	ア	イ	ウ	エ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	20	9	58	16									
3	72	37	27	36	42									
4	76	33	39	45	14									
5	69	31	33	48	14									
6	65	35	34	51	23									
全	363	156	142	238	109(645)	ア24	イ22	ウ37	エ17					

III-9 くちびるをかむ

	全	ア	イ	ウ	エ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	49	33	21	16									
3	72	52	45	13	29									
4	76	66	42	14	17									
5	69	62	45	14	10									
6	65	56	47	23	15									
全	363	285	212	85	87(669)	ア43	イ32	ウ12	エ13					

III-10 くびをひねる

	全	ア	イ	ウ	エ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	56	19	20	24									
3	72	49	27	25	17									
4	76	56	27	13	19									
5	69	60	29	26	15									
6	65	62	33	24	19									
全	363	283	135	108	94(620)	ア46	イ22	ウ17	エ15					

III-4 かおをそむける

C	全	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	51	25	15	14	19	8									
3	72	48	28	21	23	27	15									
4	76	51	20	25	27	30	10									
5	69	54	18	20	20	31	7									
6	65	56	29	33	31	29	12									
全	363	260	120	114	122	136	52(804)	ア32	イ15	ウ14	エ15	オ17				

III-8 したをだす

	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	44	13	21	19	12									
3	72	47	14	26	24	15									
4	76	55	17	27	24	5									
5	69	35	13	38	42	5									
6	65	47	25	41	37	6									
全	363	228	82	153	146	43(652)	ア35	イ13	ウ23	エ22	オ7				

III-13 ためいきがでる

	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	25	17	35	20	32									
3	72	30	27	30	24	33									
4	76	26	16	58	29	14									
5	69	42	9	39	33	5									
6	65	38	10	56	35	13									
全	363	161	79	218	141	97(696)	ア23	イ11	ウ31	エ20	オ15				

III-12 よこ目で見ると

	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10	20	30	40	50	60	70	80	90
2	81	24	48	30	13	11									
3	72	24	52	34	24	16									
4	76	28	48	35	10	25									
5	69	28	46	32	8	14									
6	65	31	46	35	19	17									
全	363	135	240	166	74	83(698)	ア19	イ35	ウ24	エ11	オ11				

Ⅲ-7 ひざをたたく

C	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10 20 30 40 50 60 70 80 90				
							ア	ウ	エ	オ	イ
2	81	49	11	13	15	25					
3	72	50	12	30	16	21					
4	76	51	12	38	21	9					
5	69	46	9	34	19	9					
6	65	52	11	45	30	9					
全	363	248	55	160	101	73(637)	ア	ウ	エ	オ	イ
							39	19	25	17	11

Ⅲ-1 うでぐみをする

C	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10 20 30 40 50 60 70 80 90				
							ア	ウ	エ	オ	イ
2	81	52	15	15	23	4					
3	72	52	26	24	20	6					
4	76	68	34	14	16	2					
5	69	64	35	14	14	1					
6	65	64	41	12	10	3					
全	363	300	151	79	83	16(629)	ア	ウ	エ	オ	イ
							48	124	13	13	

Ⅲ-11 むねに手をおく

C	全	ア	イ	ウ	エ	オ	10 20 30 40 50 60 70 80 90				
							ア	ウ	エ	オ	イ
2	81	21	50	13	11	16					
3	72	26	32	21	17	32					
4	76	27	27	23	15	12					
5	69	31	34	25	20	7					
6	65	31	25	23	34	13					
全	363	136	168	105	97	80(586)	ア	ウ	エ	オ	イ
							23	129	18	17	15

二で述べたように全体反応の段階での動き方から、三つに分類できるような反応を子どもたちが示してくれた。このことは、子どもたちの身ぶり・しぐさを通して、構える意識は、何らかの分化点があるはずである。子どもたちは、その意識する点によって反応を示してくれたわけであるから、このあたりをさぐっていけば、子どもた

ちの生感としての意識にたどりつけるはずである。このような予測の下に考察作業を進めてきたわけであるが、まず、気にかかるところは、「うでまくりをする。」「ふくれっつら。」「は、二年生を除くと、圧倒的に高い反応を示していることである。子どもたちの常として、テスト等の

場合、最初から始めることを思うと、正誤を別とすれば、反応が高くてるのは、「うでぐみをする。」「あたりではないかと考えられるが、先掲の設問は二番目と三番目に位置している。それだからこそ、この二つに反応が集中していることに意味を見つけたかと思うところである。以下、選択肢の動きの跡を追いつつ、子どもたちの生感を意味づける考察を加えていくことにする。選択肢の動きに着目させられる最も簡単に、かつ、重要なことは、各設問毎に一つだけ、構え(心的状況の方向づけ)とあまり関係がなさそうなものを加えられたものを、子どもたちは、調査Ⅲの指示、「 」の中の身ぶり・しぐさとむすびつくのは、どれですか。というのに、正しく反応してはば、各設問におけるおとり選択肢をさげているということである。たとえば、「うでぐみをする。」「で見ると、「オ()」てじなをしている。」「がおとりであるが、反応する際、みごとにさげられている。このことは、とりもおさず、子どもたちが、身ぶり・しぐさに、ある心的状況をだぶらせることを直観しているからであらうと思われる。この直観するところに、子どもたちが身ぶり・しぐさに構える意識を見なければならぬことを知っていると考えてよい。

◎内向と外向—極端と一般
「うでまくりをする。」「ふくれっつら。」「が高率の反応を示して根拠を選択肢の動きに求めると、「うでまくりをする。」「のウ・ア、「ふくれっつら。」「のイ・ウに見られる二年生から三年生への飛躍は注目して見ると、特に、「ふくれっつら。」「は、他の提示語に比較して、外見が微妙であると思われ、イメージ化が漠然となりそうであるのに、イ・ウの動きで高率をあげている。「がんばる。」「はりきる。」「すねる。」「気がすまない。」「おこる。」「が、子どもに直接的に反応しやすかったわけであるが、「うでまくりをする。」「の「はりきる。」「が「がんばっている。」「と、「ふくれっつら。」「の「すねている。」「・「気にいらぬ。」「では、内容からしては相反するものと考えられそうであるが、子どもたちは、反応の上で共通させている。両者は、外に向う姿勢のもの・内にこもる姿勢のものと相反しているが、共通していることは、人間が、意識を停滞させている状態における情動ではなく、大きな変動・振幅を伴う情動におけるものであることがあげられる。内にしろ、外にしろ情動反応としては、極端な様相で現われるものである。このあたりに、子どもたちの意識の

生態度が認められる。

日常生活の子どものたちのようすをおとなの目から見ると、「うでまくりをする。」「ふくれつつら。」「ひいては。」「おこる。」「すねる。」「はりきる。」「がんばる。」「等というようすは、それこそ日常的であるときえ思われるが、人間の情動反応を含めた構えとすると、内・外の差はあれ、変動の振幅の大きいと考えられるところに意識の集中を見る。

この面のことをさらに考察してみると、2においては、イとア・ウとの比較、3においては、アとイ・ウとの比較を試みたくなる。

つまり、「あつがっている。」「動きと、「がんばる。」「はりきる。」「の動き、さらには、「おこっている。」「の動きと、「すねる。」「気がすまない。」「の動きとであるが、「ふくれつつら。」「の方で考えてみると、情動反応の上からは、「おこる。」「という様相が、さらに分化した型の中の要素の一つとして「すねる。」「気がすまない。」「とがあると考えられる。

この面で、他の学年間において、急激な変動を上げているのが、三・四・五年生であることは、教育現場に対する資料として指摘しておきたい。

特に、二年・三年の間においては、「がんばる。」「はりきる。」「すね

る。」「気がすまない。」「の変容が急であることを提示しておきたいのである。

◎ 体感を離れる苦しさー客観の誕生
全体反応の中でBに入れたものの特徴は、二・三年生の変化が交錯していることは先述した通りである。五年・六年の間の変化が交錯しているが、Bのグループを逸脱することはない。このあたりの三年生の反応の跡を追ってみると、

6は、全体反応の中でも、各年間の変動が、三年・五年に偏って、上位へ位置する動きをとっているが、選択肢でみると、

- ・「はずかしがる。」「てれる。」「の三年での変化
- ・「こまる。」「の六年生への動きに注目しておきたい。
- ・さらに、5においては、
- ・三年での集中(混乱か?)に注目しておきたい。
- また、9においては、

・ア・イ・エ・ウの変化と上級学年でのゆるやかな離反
また、10においては、学年間の変動が大きいのであるが、

・アの高率での反応の安定とイウエの交錯
にそれぞれ注目しておきたい。
まず、三年生が見せてくれている混

乱は、変動・安定の前の混乱とも考えられるが、5において、

「考えごとをしている。」「がさがり、「ひげをさわっている。」「の上昇、及び「とくしい」「自まん」の上昇のような混乱をおこしている。

さらに、このグループにおける三年の動きを確かめるために、他のものの動きを整理してみると、

上昇しているもの

- ・自まん。
- ・とくしい。
- ・ひげをそる。
- ・はずかしい。
- ・てれる。
- ・くやしがる。
- ・がまんする。
- ・あわてている。

下降しているもの

- ・考えごとをして
- ・いる。
- ・しんばい。
- ・考えこんでいる。
- ・こっている。

のようになるが、こうしてみると、三年生の生態度がとらえられないであろうか。

急激に上昇しているものは、前項のものと同様かよっている。情動反応としては、一般的な情動(子どもにとつての)の成長を見ることができ、混乱の一回に、「てれる。」「くやしがる。」「がまん」の成長に着目しておきたい。推察が許されるならば、体感に近い情動反応の内でも、「てれる。」「などのように、「恥」に源をとる意識

の分化を、自尊心、見得等の成長とも認め、やりたくないのである。その根拠は、「くやしがる。」「なくのをがまんする。」「自まん。」「とくしい。」「の動きを認めるからである。

わが身におこるわが情動を、わが身で持てあましていく姿を、「あわてる。」「の上昇とさらには、「考えごとをしてる。」「考えこんでいる。」「の下降の助成を得ながら、想い描いてみるのである。

体感に直結するものの反応には、敏感であり、そこから、やや分化の芽を育てつつあるが、体感から離れたいわゆる「ポーズの想起」については、苦しがついているのである。

つまり、「くびをひねり」「あごをなでる。」「しぐさは、三年生の子どもたちは、「しんばい」や「考えごとをしている。」「考えこんでいる。」「という姿・構えとしては受けとれないでいるのである。それよりも、むしろ、「自まん」「とくしい」に意識は集中して、「くやしき」「てれ」を実感しようとしている学年といわねばならない。しかし、「うたがい」や「困惑」の成長を待つと、五年生・六年生でこの面の構えも安定してくると言えよう。
三年生での動きを、混乱・錯綜とするのは、こう考察してくるとやや早計であろう。

◎視点によるふり・しぐさの区別
全体反応の中で、Oに含めたものを見ると

○「ためいきがでる。」「よこ目で見える。」「ひさをたたたく。」の下降。

○「かおをそむける。」「したをだす。」の上昇。

○「うでぐみをする。」の変動。

○「むねに手をおく。」の低迷。
などが、気にかかる場所である。

ここでの動きの中で、前項に入られそうなのは、

(1) 4ーA「気にいらぬ。」

(2) 8ーウ「はずかしがる。」

エ「てれている。」

である。いずれも身ぶり・しぐさの心的状況の情動要素としては、前項に掲げられたものである。しかし、ふり・しぐさの情動適応(対応)からすると、

- ・「気にいらぬ。」の方向のものは、「かおをそむける。」しぐさよりも「ふくれつつら。」のように、イメージ化の強いものに適応しようとしている傾向。

- ・「はじ」「てれ」についても、「したをだす。」しぐさよりも、「あたまをかく。」しぐさを適応させようとしている傾向が指摘できる。

(1)については、イメージ化傾向の難易というところで現段階での考察とする。

ただし、(2)についての傾向の解明は、その根拠を人間成長の生態的発達に求めた、今後の研究考察に待ちたい。

さらに、

(3) 1ーA「考えごとをしている。」

イ「おこっている。」の動き

1ーウ「がまんしている。」・エ

「がんばっている。」の動き

の両者が、三年生から相離反していること

も、前項との関連で指摘しておきたい。

「考えごと」や「おこる」が上昇しているのは、前項での三年生についての指摘を成長の期待する上で助けているものとなる。

前項で、混乱をきたしていた両者が「うでぐみをする。」で、手を相たずさえて成長しているのは、望みの持てるところである。しかし、ウ「がまんする。」・エ「がんばっている。」の下降は、子どもたちの身ぶり・しぐさ意識の上で、何を意味しているのだろうか。

「がまんしている。」では、「うでぐみをする。」よりも、「くちびるをかむ。」方が情動適しやすいと区別をつけている。

「がんばっている。」では、「うでぐみ」よりも、「うでまくり」を適合させて、両者を明らかに区別している。

このように見てくると、身ぶり・しぐさに対する情動反応の上の視点の区別による成長が課題となってくる。子どもたちは、これとこれとこれは近いこれは、これと区別をつけるといような判断を、瞬時の内に、本能的・直感的に行なっているであろうが、その判断の視点の成長を、今後さぐらねばなるまい。

また、本項において指摘しておきたいことは、Oのグループにおける全体反応の低さと同時に、そのグループ内での上昇・下降・変動に、A・Bではなかった選択肢の動きが見られることである。

それらを、上昇・困惑・下降・低迷で整理してみると

(A) 上昇するもの

- ・「まよっている。」「はんせいしている。」「しんばいしている。」「あきれている。」「あきらめている。」

- ・「なるほどと思った。」(急上昇)
- ・「はっと気づいた。」の六年での上昇。

- ・「見たくないけど見たい。」「にくんでいる。」「ばかにしている。」のゆるやかな上昇。

(B) 下降するもの

- ・「くるしがっている。」「おどろ

いている。」

(C) 低迷しているもの

- ・「ばかにしている。」「きたないものを見た。」「見たくないものを見た。」「しめしめと思っている。」「かんしんしている。」

「しらんかおをしている。」

(D) 困惑しているもの

- ・「からかっている。」

となる。

(A)については、全体反応が低いけれども、その中では、意識の集中を呼んでいるものである。さらに整理するために、全体反応の上昇とつきあわせてみると、全体反応の上昇の推進となっていると考えられるものは残らない。しかし、そんな中でも、部分的に見てみると

7「ひさをたたたく。」

・「はっと気づく。」

・「けっしんしている。」

の適応が、六年生において、五年生の時より上昇の動きをとっていることが、全体でも部分反応においても共通していることが気にかかる。このことを意識づけるために、ア「はっと気づく。」の動きを見ると、全体反応での動きが酷似していることが指摘できる。

つまり、「ひさをたたたく。」というしぐさとの心的状況との適応の発達は、

「なるほど」という心的作用の成長を中心にして、「はっと気づく。」という作用を基盤としながら、五年から六年にかけて成長するものと考えられる。「はっと」という時間の瞬時の条件の下に、「なるほど」「けっしん」という心的状況のしくみが、「ひざをたたく。」というしぐさと結合できると考えられている。意識の上で成長していると考えてやるのは、うがちすぎであろうか。

しかし、「まよい」「はんせい」の上昇についていえば、「むねに手をおく。」ことは、身体表現の全体から見れば、上昇しているものの、それほど意識されていないと見るのが妥当であろう。

さらに、「はかにする。」「にくむ。」「見たくないけど見たい。」の上昇を包含している「よこ目で見ると」しぐさの動きを見ると、三年生でどれもが上昇するのに四年以上になると、ほぼ三年の反応率を越えることはない。全体反応で見ても、四年生から、他のしぐさを優先させている。身体表現の中で、目ほど、口のごとくにもものを言うものはないことを、おとなたちは、ある時期から体験するのに、子どもにおいては、このような結果が出ている。このことを、あえて子どもの味方になって考えれば、「目」の動きによる身体表

現は、他の体の部位よりも微妙なところまで可能であることと関連をつけてやりたくなる。しぐさを見る側の目の意識と、しぐさをする側の目の意識が、平衡している時に、しぐさとして意識の上での成長を見るものであることからすれば、このしぐさにかかわる子どもたちが示した動きは、未だ、その域に達せずの感を持たざるを得ない。

しかし、人間は、いつでも成長に望みをかけたくなるのがまた人間であるとすれば、三年の子どもたちが、「あいずする。」に反応するなどという混乱は、却って到達への段階かとも思われて、楽しみなところでもある。

さらに、「ためいきがでる。」「における動きを見ると、「しんばい。」するという心的状況の表現とし、「くびをひねる。」「よりも、「ためいきがでる。」「の方を優先させていることは、「首」「息」を、それぞれ体感との接近度を予測・直感し、比較してみればうなづけるところであるが、「あきれる。」「あきらめる。」「については、上昇しているが、全体では下降している。このことは、他に意識を向けやすい身ぶり・しぐさがあるのかも知れないが、本調査の範囲・段階ではわからない。

全体では、下降しているものは、そ

の動きが、選択肢別の動きに見る「あきれる。」が、三年・五年・六年での動きと似ていることを指摘しておき、この時期の子どもたちの生地の断面として提示しておきたい。

さらに、「あきらめる。」が、根強く徐々に上昇しているのと、「ためいきがでる。」「の全体反応に見る六年の動きを結びつけて想像してみると、何かこの時期の子どもたちの姿を彷彿とさせるものがある。

この二つの指摘を設問別のグラフに見る限り、三年で集中し、四五年と進むにつれて、「くるしがる。」「しんこきゅうしている。」「と離反しながら成長してきているのを見ることができからである。

「あきらめ」「あきれ」「しんばい」というような、他の事象と対峙することによって心的反応を起すことによる、また、対峙することによって起る関係にまつわる状況についての心的反応というような複雑なしくみを持つ構えの成長の苦しきということができよう。苦しきがある故に、変動が激しいのかも知れぬ。

低迷・困惑しているものと、
• 「ばかにする。」「きたないものを見た。」「見たくないものを見た。」「しめしめと思う。」「知らんかおをする。」

• 「からかっている。」
などがあるが、このあたりは、調査Ⅱと関連しそうである。

知らんぶり・そ知らぬぶりというふりが、「かおをそむける。」「よこ目で見る。」「というしぐさ、あるいは、「したを出す。」「というしぐさの統合の上のふりであろうことを思うと、この低迷は、うなづける。

表現主体の本心と離反し、相反する関係にしぐさを要求されるふりの構えは困難なであろう。

ついつい見なくなってしまうたり、したを出すのが早すぎて、ふりがつぶれてしまうことが、子どもの生活の中で、よく見かけられるのを思い出すからである。

また、「からかい」というような、本心を直接ではなく、一度乾かして、間接的に表現しなくてはならないものも困難なようである。「からかい」の成立が極度に達した時は、「からかい」がばれないで、したをだしたことがばれなかった時である。もし、それが、早く見やぶられると、ずるい・わるいなどという陰性反応を起すのであって、「からかい」の作用・心的なしくみは、先述したようなことであることを思うと、日常の子どもたちの「からかい」は、いたずらの域を出ていないとも思える。

(横浜・汐見台小教諭)